

コミュニティデザイン学科名称変更にあたって

——2024年度入学者より「まちづくり学科」へ——

Changing the name of the Department of Community Design

— From 2024 enrollment to the “Department of Machi-Zukuri” —

跡見学園女子大学は、2024年度1年次入学者より、観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科の名称を「まちづくり学科」に変更する。日本語表記の名称にすることで、学科の特性と人材育成目標を的確に表現するための変更である（2023年4月12日第2回大学評議会資料No.2「名称変更の概要」）。変更は学科の名称のみであり、カリキュラム編成の方針、学位授与の方針及び教育課程等の変更はない。なお、2023年度以前の入学者は、入学時の学科名称である「コミュニティデザイン学科」を継続して使用する。

「まちづくり学科」への名称変更にあたって、改めて、観光コミュニティ学部が2015年度に設置されたときの趣旨を振り返り、学科設立時に設定した教育目的を確認するとともに、今般の名称変更の意義を考えたい。

まず、「設置の趣旨等を記載した書類」より「1. 設置の趣旨及び必要性」の章を読むと、「地域コミュニティの再生・活性化をはかるデザイン能力の養成をめざして、文学部、マネジメント学部次ぐ第三の学部として、観光コミュニティ学部の設置を申請するものである。」（「設置の趣旨等を記載した書類」p2）と書かれている。そして、この文章の前にあるのが、以下の文章である。

（前略）地域コミュニティの再生・活性化のために必須と考えるものは、大学教育の中で観光デザイン能力とコミュニティデザイン能力を養成することである。観光デザインは観光という視点を中核に、グローバルな視点も加えながらさまざまなコミュニティの再生・活性化をはかり、コミュニティデザインはコミュニティ全体を視野に置き、何よりもそこに住む者の視点を重視してコミュニティの再生・活性化をはかるものである。2つのデザインは、相互に補い合う部分を持ちつつ、それぞれ独自の視点からコミュニティの再生・活性化に資するものと確信する。

（「設置の趣旨等を記載した書類」p2）

上記の趣旨を踏まえて、コミュニティデザイン学科では、「コミュニティデザインに関する広範な問題意識と実践的な知識を備え、コミュニティをデザインする能力を有して地域社会の担い手となる人材の養成」を教育目的に掲げている（前掲書類p3）。

こうした学科の学びの内容や人材養成の目的は変えずに、なぜ学科名称を変更するのだろうか、この点を次に考えてみたい。

冒頭に引用した文書「名称変更の概要」には、「「コミュニティデザイン」という概念が社会に十分浸透しておらず、受験生をはじめとした高等学校の現場や、学外から、学科の内容が分かりづらい、という指摘を受けている」ことが変更理由として記されている。しかし、「コミュニティデザイン学科」の名称では学科の教育内容が分かりづらいことの原因は、「コミュニティデザイン」という概念が社会に十分浸透していないからというより、「コミュニティ」という用語を用いていることにあると思われる。「コミュニティ」という概念はさまざまな意味で使われており、普遍的な定義づけが難しい。「コミュニティ」という用語に対する一般的な共通認識がないため、人によって用語の使い方に違いが生じる。こうした多義的な用語を学科名称に使っていることが、学科の内容を分かりづらくしている大きな要因になっているのではないだろうか。

設置趣旨書類における学科名称の説明では、「コミュニティ」の用語について十分な説明がないが、文脈から、「地域コミュニティ」を想定していることがわかる。しかし、「コミュニティ」という概念は「地域に根指した集団」という意味で用いられるだけではない。ネットワーク概念を導入したコミュニティ研究の広がりの中で、「パーソナル・ネットワークとしてのコミュニティ」が注目されている。特に現代のような情報社会では、インターネット上に、特定の場所に限定されない「ヴァーチャル・コミュニティ」の増殖が著しい。

コミュニティデザイン学科の教育の目標は、地域に根指した集団である「地域コミュニティ」の担い手となる人材養成にある。そうであれば、さまざまな意味で使われる「コミュニティ」ではなく、「まち」や「地域」という用語を用いた方が、学科の学びの内容を明確に理解できるだろう。「コミュニティデザイン」ではなく、「まちづくり」あるいは「地域づくり」とするのである。最終的には「まちづくり」の名称を選んだわけだが、「コミュニティデザイン」に替えて「まちづくり」とすることによって、学びの内容が限定されることはない。むしろ、「コミュニティ」という用語を使わないことで、「人と人のつながり」「ネットワーク」あるいは「ソーシャルキャピタル／社会関係資本」の概念を用いて地域社会を構想しやすくなるともいえよう。

今般の名称変更は日本語表記にすることから生じる〈分かりやすさ〉より、普遍的な定義づけの難しい概念である「コミュニティ」の用語を使わないことから生じる〈分かりやすさ〉が重要だと思われる。「まちづくり学科」の名称を用いることで、学科教育の目標が地域社会の担い手となる人材養成にあることが、学外に向けてだけでなく学内に向けても明確となったことの意義は大きいと思う。学科所属の教員にとっても然りである。もちろん学科で学ぶ学生にとっても、学びの目標がわかりやすくなることは、学修促進に有効であろう。名称変更の効果が多方面に良い形で現れることを期待したい。

佐野 美智子

(コミュニティデザイン学科主任)